




植樹式 1997



時の蘇生・柿の木プロジェクト

目次

2020年更新

2月28日		渡保育園 1 日本・熊本県・球磨郡
3月24日		奥州市立広瀬小学校 2 日本・岩手県・奥州市（旧江刺市）
4月22日		外旭川幼稚園 3 日本・秋田県・秋田市

渡保育園

🇯🇵 日本

📍 熊本県・球磨郡

🌱 1997年2月28日

応募してきてくださった渡保育園の深水園長先生は第2次世界大戦でたくさんの方をなくした経験を持つことから、子ども達に平和を伝える大切さを実感してきた方です。1980年から毎年8月9日の長崎原爆忌を“平和保育の日”として活動してきたこの保育園では、子ども達のみならず父兄・家族とも苗木との関わりを考える植樹式を開催。植樹式に先立ち、「柿の木愛称募集」や「父兄が10年後のわが子に送る言葉



のタイムカプセル」といった親子で柿の木を考える機会を設け、植樹式ではその愛称発表として子ども達が「かきまるくん」、「かきえちゃん」という名前を元気よく発表しました。また子ども達と先生方で作った創作紙芝居「柿の木親子のものがたり」は、子ども達に馴染みのない戦争をわかりやすくとらえ父兄からも大評判でした。

さらに保育園の父兄をはじめ広く県下の人々に参加を呼びかけるイベントとして、大分在住のアーティスト二宮圭一さんの「風船あげ・プロジェクト」が行われました。これは渡保育園に柿の木が植樹されたことを知らせるとともに、柿の木との関わりをきっかけづくりとして県下や父兄に呼びかけて、200個ほどの風船を一人ひ

とつずつ膨らまし、つなげてアドバルーンのように上げるもの。そして、そこでその風船を見ながら参加者全員で昼食を楽しみ、植樹のことを話し合いました。このイベントは人々が柿の木との時間を共有し、新しい人々と出逢う“場”を提供することを目的としたもので、子ども達にとって馴染みある風船という素材を用いることで、日常のなかで再び風船を見たとき、柿の木を思い出してもらえることを願って行われました。その後も、保育園では毎年柿の木の下で平和教育が継続され、2001年、柿の実から種を7個採取。2002年5月30日、被爆柿の木3世が誕生しました。

2006年8月5日には10周年祭が行われ、当時4、5歳だった子ども達と、その保護者、二宮圭一さんと共にタイムカプセルが開けられ、柿の木と子ども達の成長と再会を祝福しました。



奥州市立広瀬小学校

🇯🇵 日本

📍 岩手県・奥州市（旧江刺市）

🌱 1997年3月24日



宮沢賢治の故郷、岩手県現在の奥州市江刺立広瀬の柿の木にある広瀬小学校から植樹の応募をしてくださったのは、その年退官を予定されていた松本賀久也校長先生です。こども達に残していきたい大切なメッセージとして、この「被爆柿の木二世」を託したいと考えました。植樹式ではこども達がこの柿の木のことを考える機会として、6年生を対象に樹木医・海老沼先生による「被爆柿の木二世」の特別講義が設けられました。この松本先生の想いを受け、宮島達男の「柿の木の10年後、私の10年後」と題したワークショップを実施しました。これは6年生を対象にしたビデオインタビューのワークショップと、全校生徒106人で描くドローイング・ワークショップの2つから構成されています。

ビデオインタビューでは、6年生20人に「柿の木の10年、私の10年」という質問をし、答える様子をビデオに収録するというもので、こども達と柿の木の「心の接点」を創出する狙いを持っています。ビデオの前の6年生は、それぞれの夢や将来を語り、そして柿の木の10年後に想いを馳せました。全校生徒のドローイング・パフォーマンスでは、宮島達男が描いた16メートルに及ぶ「10年後の柿の木」のまわりに全校生徒が10年後の自画像を想像して描くというもので、10

年後の展示予定と再会を約束しました。こども達と柿の木の共生を自覚させ、10年間の柿の木との時間を開始させる意味を持っていました。

その後、この広瀬小学校では、父兄による柿の木実行委員会の活動が開始。苗木の後ろに由来を説明した立派なボードを設置し、定期的な集会を行っています。また、毎年1月になると「雪囲いの式」といって、寒い岩手県の風土の冬に苗木が耐えるように、雪の降る前にみんなで苗木の根元の土に苗代を敷くという行事も開催されるようになりました。寒い岩手の地でも、柿の木の苗木は暖かい人々の心に支えられ、すくすくと育ちました。

2007年8月15日には、10周年を記念するイベントが、松本先生、海老沼先生、小池先生、宮島達男出席のもと開催されました。あの時描いたドローイングも展示され、6年生のインタビュービデオを皆で見ました。また、立派に育った柿の木には、赤いL.E.D.が取り付けられ、星降る夏の夜に点灯式が行われました。すでに結婚をして、こどもを抱いて参加している当時の小学生。時の流れとともに柿の木が継承されてゆくことを実感しました。



外旭川幼稚園

🇯🇵 日本

📍 秋田県・秋田市

🌱 1997年4月22日



秋田は東北でも珍しい戦争による空襲のあったところですが。しかしそのことも今は忘れられています。戦争体験の薄い秋田で育つ子ども達に戦争の記憶を伝え、秋田のいろいろな世代の人々が平和を考えるきっかけにしたい。外旭川幼稚園ではこうした考えから、園長先生を中心に植樹体制が発足。実行委員会に植樹を申し込んできてくれました。

幼稚園では園児全体が参加できるイベントとして、苗木の愛称命名や、10年後に開封するタイムカプセルを用意し、そこへ子ども達の描いた絵などを入れる植樹式を計画。植樹式の最後には、全校園児が平和を願っていっせいに風船を空に放ち、みんなでその行く末を見つめました。こうした幼稚園の植樹式にちかえて、子ども達と柿の木を結ぶパフォーマンスを行ってくれたのはストリングラフィ（糸電話を張り巡らした空間で演奏行為をするもの）アーティストの水嶋一江さんです。実際に植樹する苗木を中心に、幼稚園の体育館全体を使ってたくさんの糸電話を張り巡らし、「10年後の柿の木」の姿を現すインスタレーションを作りました。当日は水嶋さ

んがお手本として糸をこすって音を出すと、子ども達も興味津々。各自なりのやりかたで、一斉に小鳥のさえずりのような音を奏で始めました。そのやりとりは、まるで苗木が大きくなって、その木と子ども達が交信しているかのようでした。「子ども達が柿の木に出会い、身近な存在として感じてくれたら・・・」と、水嶋さんは考えたそうです。そして「この糸電話でできた大きな柿の木のように、苗木が大きくなるときにまた会えるように」、子ども達に向かって水嶋さんはそう語りかけました。この日響いた柿の木の美しい音色は、透き通るようなメッセージとなって参加者の心の奥にしまい込まれました。

2007年7月26日、外旭川幼稚園で10周年祭が行われました。当時の年少（中学2年生）、年中（中学3年生）、年長（高校1年生）の子ども達が保育園で再会しました。10年前の植樹式の際に埋めたタイムカプセルを開け、その後、教室内で当時の先生から成長した子ども達に、掘り起こされた絵などが手渡されました。子ども達はびっくりしたように当時をふり返り、柿の木の意味を改めて考える一日となりました。